

2006 年 1 月 4 日

東京大学医学部附属病院

広報企画部

第3回 記者懇談会ご案内（小児科・小児外科）平成 18 年 1 月 16 日

今回で第3回目を迎えます記者懇談会は、小児科と小児外科の合同懇談会となります。小児科・五十嵐隆教授、関根孝司助教授、小児外科・橋都浩平教授の講義により、小児医療の現状と問題点などの話題をご提供してまいります。

当日はお気軽にディスカッションできる懇談会とさせていただきたいと存じますので、皆様、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

（※概要につきましては次頁をご参照ください。）

【開催日時】平成 18 年 1 月 16 日（月） 17：00～19：00

【開催場所】東京大学医学部附属病院 管理研究棟 2 階 第 1 会議室

【講演者】東京大学医学部附属病院 小児科 五十嵐 隆 教授、関根 孝司助教授

東京大学医学部附属病院 小児外科 橋都 浩平 教授

【お申込方法】東京大学医学部附属病院 広報企画部までメール (pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp) にてお申込ください。

×切 平成 18 年 1 月 12 日（木） 17：00 迄

【会場地図】



【演 題】

1. 「小児医療の現状と課題」 東京大学医学部附属病院 小児科 関根 孝司 助教授

近年、小児医療について救急医療体制をはじめとする様々な問題点が指摘されている。またこの数年、医療全般で生じているダイナミックな変化（新研修医制度、国立大学病院の独立行政法人化、医療制度改革など）は小児医療にも重大な影響を与えており、特に地方圏ではその影響は深刻である。小児医療は国の最重要課題の一つである「少子化」とも密接に関連している。現在の小児医療の抱える課題および今後の方向性について、概説する予定である。

2. 「こどもの腎臓病と学校検尿」 東京大学医学部附属病院 小児科 五十嵐 隆 教授

米国とわが国では共に近年を追う毎に慢性腎不全患者数が増加している。しかし、45歳に慢性糸球体腎炎が原因で末期腎不全となった成人患者の割合はわが国では減少してきたのに対して、米国では減少していない。1999年に原発性糸球体腎炎により末期腎不全となったわが国の20歳未満の小児は29人であったが、米国では1996-1999年の平均で年間311人（わが国の人口数に合わせると111人）であった。これらのデータから、小児期に末期腎不全を予防する点で学校腎臓検診の有効性を示唆している。

3. 「ブラックボックスから患者へ：胎児診断・治療の進歩」

東京大学医学部附属病院 小児外科 橋都 浩平 教授

かつて胎児は医師にとって、ブラックボックスであり、生きているか死んでいるか、大きい小さいくらいしか情報がなかった。それを大きく変えたのが胎児超音波検査の進歩である。これにより先天性疾患を出生前に診断し、疾患によっては出生前に治療を行うことが可能となった。さらに現在、成人になってからのメタボリック・シンドロームの原因が胎児期にあるとするバーカー仮説が注目を集め、胎児医学の確立が医学の重要課題となってきた。

【お申込・お問合せ先】

東京大学医学部附属病院 広報企画部（担当：星野 裕子）

電話（直通）：03-5800-9188

e-mail: pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp

お席の確保等の調整があるため、参加ご希望の方はメールにて事前のお申し込みを宜しくお願い申し上げます。

×切：平成18年1月12日（木）17：00迄
